

「救いたい心」をつむぐコミュニケーションマガジン

# 赤十字

# 1

JANUARY 2021 NO.968

# NEWS

Japanese Red Cross Society NEWS  
<http://www.jrc.or.jp>

令和3年1月1日(毎月1日発行)  
赤十字新聞 第968号  
昭和24年9月30日 第三種郵便物認可



わたしも赤十字

献血の協力者

井手畑大海 (いではた・ひろみ) さん【p.4でご紹介】

特集

## 3.11にはじまった「命(血液)のリレー」

人間を救うのは、人間だ。



赤十字新聞 編集・発行/日本赤十字社 広報室 〒105-8521 東京都港区芝大門 1-1-3 TEL: 03-3438-1311 一部20円 赤十字新聞の購読料は会費に含まれています。

 **日本赤十字社**  
Japanese Red Cross Society

全国から東北へ！ なんととしても被災地に血液を届けよう！

# 3.11にはじまった「命(血液)のリレー」

毎年1月号でお届けしている「はたちの献血」特集。東日本大震災から10年に当たる今年は、3.11後に全国から寄せられた献血の支援、そして震災当日からの血液のリレーについて、岩手・宮城・福島・東京の日本赤十字社 血液センター職員がリモートで語り合いました。



## 3月11日、血液のリレー開始！ 患者さんの命をつないでいくために

**木村** (宮城) 2011年3月11日、東日本大震災の発生で、宮城県血液センターは壁や天井がはがれ落ち、ライフラインも寸断。津波の情報も入り、血液の確保が厳しくなると直感しました。東北の基幹センターとしての役割もあり、稼働が止まれば宮城を含む3県への供給が止まるという状況に陥りました。

**坂本** (岩手) 岩手のセンターは比較的無事でしたが、地震の30分後に宮城センターの非常電源が作動しないと連絡をもらい、盛岡で大量のドライアイスを積み、途中サイレンを鳴らしながら仙台まで車を走らせたのを覚えています。

**渡邊** (福島) 原発の問題もあって対応を続けることへの不安もありましたが、我々がやらなければならないという思いで業務に当たりましたね。

**杉山** (東京) 被災地ではない東京でも大きな揺れを感じました。テレビで情報収集し、すぐに本社の血液事業本部へ電話をかけて今後の対応について調整を進めました。東京は全国の血液量をコントロールする立場ですので、被災地の在庫状況に鑑みて製品数の調整を本部と行うなど、災害優先電話をつないだまま

にして常に話せる状態にしました。

**渡邊** 供給課は、災害時に限らず管内での製剤不足が見込まれるときは、広域伝送の需給調整を日頃から行っています。当時も同様に行うものだと認識していたので、東京から血液を受け取って福島県内へ、さらに岩手・宮城・山形の3県分を各所とスケジュールの調整しながら機動力のある車両を使って届けていました。

**杉山** 東京では警察や道路公団と交渉し、震災当日の出発は結局夜中になりました。血液のリレーを続けた約2カ月の間、全国からの支援の取りまとめと、東北で必要とされる血液・血液製剤の数量を把握するため、毎日午後8時

の出発を安定して続けていました。

**木村** こんな大きな災害でも血液が届く、その対応の速さにはとても助けられましたね。

**渡邊** 原発30km圏内のいわきや相馬には主要な病院があり、血液の供給を継続する必要がありました。運ばれてきた血液を原発周辺地域に届けるのは過酷な業務ですが、職員は皆、その先にある患者さんの命をつないでいくという気持ちで、続けていたと思います。

## 必ず届ける！全国の支えが力になった

**木村** 約1カ月もの間、宮城県では検査と製



2011年3月11日、大きな揺れにより、宮城県血液センターの作業室では血液検査用機器が移動したり、資材も倒れ散乱した



2011年3月22日、不足する灯油を被災地に届けるため献血運搬車に乗せる血液センターの職員たち

造がストップし、採血の受け入れができませんでした。不足しないように毎日全国から運ばれてくる血液を、崩れた道路を迂回しながら、毎日医療機関を回って届けていました。皆さまからの支えを実感した出来事でしたね。**坂本** 被害が大きく車が入れない沿岸の病院に血液を手持ちで運んだときにはとても喜ばれました。一方で、ある病院からはこんな状況でも本当に血液が届くのかと聞かれ、必ず届けます！と言い切ったことも。それもすべて、全国の方が献血で支援してくれて、皆が一生懸命運んでくれたからできたことです。南海トラフ地震など、今後想定される大災害がもし東北以外の地域で起こったときは、今度は東北の私たちが結果して支援できるようにしたいですね。

**杉山** どの地域であろうと赤十字の人間として血液を供給し続けるという気持ちを、全国の供給課の人たちはみんな持っていますね。

**木村** 震災を踏まえて新たな課題も出てきていますし、**コロナ禍で血液確保が難しい中、全国へ恩返しではないですが、困っている場所があれば1本でも多く届けられるように頑張っていきたいと思っています。**

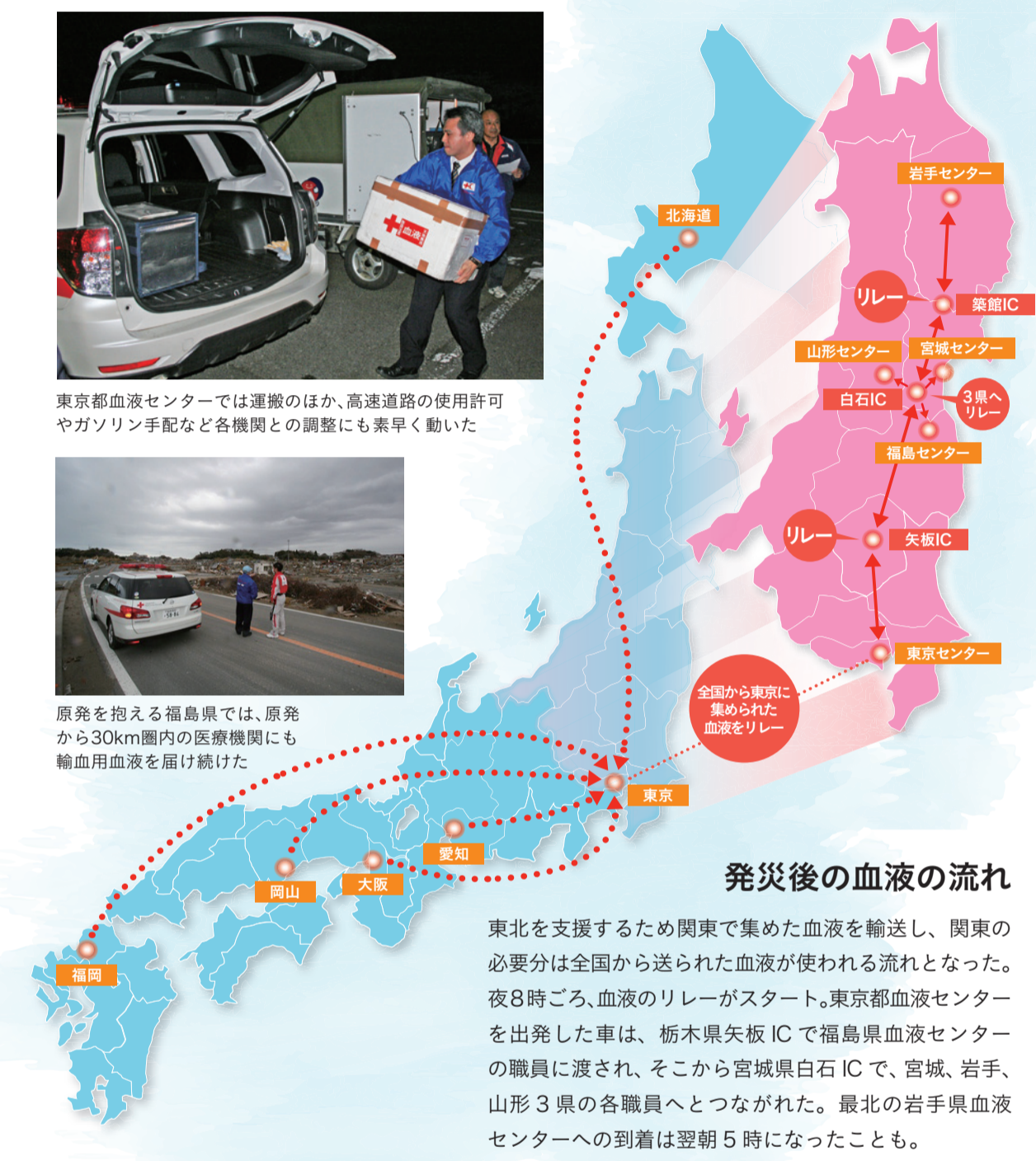
**渡邊** 震災時は全国でたくさんの献血が集まりました。血液製剤には保存期間が短いものもあり、長く継続した支援が必要です。安定供給を続けていくためには、日赤の血液事業を日本の皆さんにより広く知ってもらえるよう努力していかなければと改めて感じました。



東京都血液センターでは運搬のほか、高速道路の使用許可やガソリン手配など各機関との調整にも素早く動いた



原発を抱える福島県では、原発から30km圏内の医療機関にも輸血用血液を届け続けた



### 福島 渡邊さん

#### 自ら動く職員に根付いていた人道精神

原発事故で、県内から人が避難していくような状況下で、福島で血液事業に携わる多くの人間が「赤十字の職員である自分がやるしかない」という思いを抱いていたのではないかと思います。私自身も赤十字の人道の意識が根付いているのだと改めて感じました。

### 岩手 坂本さん

#### すべての人の支えに心からの感謝を

東北に血液を回すことは、関東の不足分をほかの地域が補うこと。あのとき、全国規模の大きな血液の循環が生まれていました。日赤の血液事業は横のつながりが強く、県を超えた支え合いが発災直後から機能しました。献血者と運んでくれた仲間に感謝しています。

### 東京 杉山さん

#### 血液を届ける使命のために動き続けた

血液を必要なだけきちんと届ける。血液事業に携わる人間は常日頃からそれを至上の使命として活動しています。東日本大震災は大きな爪痕を残しましたが、多くの人が震災翌日から献血ルームに足を運んでくださいました。その行動力に日本人の心の温かさを感じました。

### 宮城 木村さん

#### オールジャパンの支えを実感した日々

採血が止まり、献血ルームの職員はチームを組んで混乱の最中にある石巻赤十字病院の支援へ。そこには事業の違いを超えて支え合う赤十字人の姿がありました。全国の血液センターが奮起して2割増して献血を集めてくれ、オールジャパンに支えられたと実感する日々でした。

令和3年  
「はたちの献血」  
キャンペーン  
1月1日(金)～2月28日(日)

今年山之内すずさんとべこばがキャンペーンキャラクターに就任！献血者が減少するこの季節、新たに成人を迎えるはたちの若者を中心に、献血への協力を呼びかけます。

## TOPICS

## 新年のご挨拶

## 変化する世界、新たな挑戦

日本赤十字社社長 大塚義治



昨年<sup>あいさつ</sup>の新年のご挨拶で私は、「時代の変化はますます加速し、我々が取り組むべき課題はさらに広がりを見せています」と申し上げました。

しかし、日本や世界が、未知の感染症によってこれほど大きな影響を受け、急激に変容することになるとは想像もできませんでした。

新型コロナウイルス感染症で亡くなられた方は世界では膨大な数にのぼりますが、人々の生活や経済に与えたダメージも計り知れないものがあります。何より憂慮されるのは、社会における「分断」が拡大したことだとも言われ、もしそうであるならば、私たちが取り組まなければならない新たな課題が生まれていることを意味しているのかもしれません。

この新型感染症に対しても、日赤は全力で、総力を傾けて戦ってきました。昨年2月の横浜港クルーズ船内への医療救護班派遣に始まり、急増する感染者に対する医療の確保、そしてさらに、ウイルスがもたらす不安・偏見・差別をなくすための啓発活動へと広がりました。

特に、極度に緊迫した状況が続く中で、人々

の命を守り、地域の医療を支えるために奮闘する全国の赤十字病院の医療スタッフに、私は繰り返し、感謝と敬意を表したいと思います。

また、血液事業は一刻たりとも業務の停止は許されず、日赤はその大きな責任を一身に担っています。そのために日々奔走する関係職員もちろん、その他の事業や活動にエッセンシャルワーカーとして従事する日赤職員についても、私は心からのエールを送るものです。

これらの活動に対しては、日本全国から、温かい励ましのお言葉や、さまざまな形でのご支援をいただきました。日赤のスタッフの頑張りを、見守り、応援してくださるたくさんの方々がいる……。そのことが、第一線のスタッフにどれほどの勇気を与えたことでしょうか。感謝の思いは、とても言葉で言い尽くせません。

赤十字は「救うを託されている」団体です。どんな社会の変化にも、どんな課題にも、柔軟に対応していかなければなりません。

我々の新しい挑戦が始まります。

本年も、どうぞよろしく願いたします。

## わたしも赤十字

## 今月の表紙

赤十字にはさまざまな形で赤十字の活動に参加する支援者がいます。全国の支援者の中から毎月お一人を、温かいメッセージと共にご紹介します。



献血の協力者

広島大学医学部霞キャンパス同好会  
「Kasumi-Bloodonors(カスミブラッドナース)」代表

**井手畑大海** (いではた・ひろみ)さん

広島県広島市/21歳

## 医療の道を目指す学生に、もっと献血を広めたい！

医師を目指して大学に入りましたが、実際に患者さんと会う機会はほとんどありません。このまま勉強だけして医師になって、本当に世の中の役に立ってるのかなと考えることも多かったんですが、献血の啓発活動を始めて、反響をもらうたびに誰かの役に立っているという実感が湧いてきて、この活動をして本当によかったな、と。医学の勉強も頑張ろうというモチベーションにもつながっています。

僕らの同好会は、献血への理解を深めるために2019年11月に発足しました。しかしコロナ禍で集まることも難しく、日赤にも協力していただ

てオンライン勉強会を開催しました。どうしたら献血のハードルが下がるだろうと考え、心理的な距離が近いLINEで献血の疑問に答える内容を発信したところ、献血ルームでの手順や服用薬についてなど具体的な質問や「献血のことを教えてもらってよかった」などの感想まで、前向きな声が想定以上に集まりました。

実は、僕自身は献血でVVR(血管迷走神経反応)という反応が出てしまう体質です。自分ができないぶん、医療従事者を目指す周りの学生に少しでも献血への興味を持ってもらいたい。これからもこの活動を盛り上げていきたいです。

献血するあなたも  
赤十字です

献血Web会員サービス  
**ラブラッド**

さまざまな特典が受けられる便利なWeb会員サービス「ラブラッド」に、ぜひご加入ください！安定的に血液を供給するために、皆さまのご協力をお願いいたします。



## ラブラッド会員になると…

- 全国すべての献血ルームのWeb予約が可能になります
- ポイントをためて記念品と交換できます
- 血液の検査結果などを含む献血記録がいち早く分かります
- 会員限定オリジナルデザインの献血カードに交換できます
- メールやLINEで会員限定のお知らせやご案内、献血の依頼などが届きます



その他、特典いろいろ！  
会員登録はこちらから

<https://www.kenketsu.jp/>

TOPICS

## 第三回ヤングリポーター・コンペティション 「日本赤十字社賞」受賞者の取材成果を発表！

紛争下で人道支援を行う赤十字国際委員会(ICRC)が、早稲田大学ジャーナリズム大学院と主催するヤングリポーター・コンペティション。これはジャーナリスト志望の若者を対象に、広くドキュメンタリー映像やエッセーを募集するものです。映像や活字、写真、デジタル、そして人道支援に携わる5人の審査員によって、ICRC賞、日本赤十字社賞、毎日新聞社賞の3つの賞が選ばれます。

第一回の「思いやり&助け合い」、第二回の「多様性と寛容」に続き、2019年に行われた第三回のテーマは「希望」。日本赤十字社賞に輝いたのは、エッセー作品「米国ユタ州の日系人収容所を訪ねて」を応募した中央大学4年生の柳沢直己さんです。柳沢さんには、日本赤十字社賞の副賞として、日赤の国内活動の取材機会と発表の場が与えられました。

この度、特命リポーターとして柳沢さんが取材したのは、日赤の献血推進課で働く職員です。ラグビー部員だった学生時代、試合中の事故で靭帯断裂のケガを負い、手術で輸血を受けたことをきっかけに日赤へ入社した経緯を細やかな取材で聞き取り、原稿にまとめています。この取材をきっかけに柳沢さん自身も献血を初体験。それらの様子を記したりレポート全文は、右記の二次元バーコードからお読みいただけます。



取材の数日後、自らも体験するために献血ルームへ足を運んだ柳沢さん。初めての献血は400mLという量に圧倒されながらも、思ったより短時間で簡単に終わり「良い意味で私の献血への想像が裏切られた」と感想を記した

日本赤十字社の喜多徹広報室長より表彰される柳沢さん(右)

柳沢さんのレポート記事はこちらから▶▶  
[http://www.jrc.or.jp/activity/blood/news/201216\\_006481.html](http://www.jrc.or.jp/activity/blood/news/201216_006481.html)



3.11 あれから  
10年を生きて

第10回

東日本大震災の発生から2021年3月で10年。  
3月号まで「3.11」から人生を変えた人々の物語を毎月連載します。

## 「明日は少しでも幸せに」…混沌の中で探した光

あまのかずひこ  
福島大学 特任教授 天野和彦さん

「明日は、今日よりも幸せになりたい。この願いは、全ての人の心にある」  
…これは、東日本大震災後、避難所運営をしていたときの私の信条です。

私が「ビッグパレットふくしま避難所」に県庁運営支援チーム責任者として派遣されたのは2011年4月11日。県から指示を受けたのはその2日前です。3.11の震災から1カ月たっていました。それまでは既定通り、町村が避難所を運営していましたが、ビッグパレット避難所は危機的状況に…。その理由は、3000人もの大規模避難所は「ルールや秩序を保つことが困難な場」であり、被災している自治体の職員がそれをコントロールするのは、限界があったからです。しかも、避難所でノロウイルス感染症が発生し、4月9日は30数人だったノロの患者が2日で100人を超え、感染対策と運営の立て直しに一刻の猶予も許されない状況でした。

ノロウイルス流行の抑え込みのため、行政の保健師やDMATも避難所に入りましたが彼らの業務ではできないことがありました。感染対策には環境整備が必須、ところが避難所での環境整備とは避難者一人一人と交渉し、彼らの考えや行動を変えてもらうこと。保健・医療の範囲を超えています。

ノロは吐しゃ物が乾燥し粉塵となつて舞うと感染が広がるため、保健・医療チームが徹底した清掃と消毒を行い、私たち運営チームが避難者たちを説得、と役割分担をしました。説得は話すだけでいいと簡単に思われるかもしれませんが、これが難しい。1カ月間生活していた場所から移動するのは獲得した権利を手放すことでもあり、不安ですから、ほとんどの人は動きががりません。そこで、根気よく相手の不安を取り除きながらメリットを提示するなどして交渉します。この時期、私の活動は「誰もが幸福になりたいのだから」という信念に支えられていました。

大規模避難所には、あらゆる人がいます。中には、ルールに従わない人も、

人目もはばからず女性や子どもを不安にさせる行動をする人もいます。私たち運営チームが避難所に入ってから、多くの女性から相談が寄せられ、女性のために着替える場所や女性専門の相談窓口も設けました。相談の中には深刻なものもありました。誰か一人でも「ここで生きていくのはつらい」と感じるなら、それは人権の問題です。運営に携わるようになって気づいたのは、避難所運営は、一人一人の人権と幸福を守る仕事だということ。不思議なことに、それまでの自分の経験…障害児教育の教師として子どもの人権を考えてきたこと、県の社会教育担当として高齢者から幼児まで世代を超えて人の幸せとは何かを学んだこと、社会教育という分野で行政を超えたネットワークを築けていたこと、それはすべて、この大規模避難所の運営に生かされ、まるでこの大仕事のために、用意されていたように感じました。

避難所運営を成功させるには、誰か一人の活躍ではなく、保健・医療も運営も避難住民も力を合わせる総力戦が必要でした。この経験で、私のネットワークはさらに広がり、新しい関係を構築する中で、日赤が放射線の被害がある中でも救護活動を行うために定めた「ガイドライン」の作成委員会にも参加しました。そして今、私は「福島という故郷をあきらめず、昨日よりも幸福を感じて生きられるように」と、コミュニティの支援活動に取り組んでいます。



ビッグパレットふくしま避難所の運営を行っていた当時(写真中央)



全国各地  
あなたの生活のすぐそばで  
日本赤十字社の活動は  
行われています。

**全国** コロナ禍の「海外たすけあい」  
支え合う世界を続けていこう

今年も「NHK海外たすけあい」が各地で実施されました。街頭募金が中止になる中、石川県では、地元園児が密を避けるため小グループに分かれてNHK金沢放送局を訪問し、募金。愛知県では、NHK名古屋放送局と百貨店の協力を得て展示ブースを設置し、豆や飲料水など救援物資の見本を展示。寄付が支援の現場へどんな形で届いているのかが可視化して協力を呼び掛けました。



コロナ禍で人道支援を続ける各国赤十字社の活動を展示(愛知)

**岐阜県 群馬県** コロナ禍でも、備えが大切!  
各地の学校で防災教育を実施

コロナ禍でも災害はいつ起こるか分かりません。青少年赤十字の加盟校では3密を避け、防災教育が行われています。群馬県の館林市立第四小学校では地域の防災訓練と合体させ学校公開型の防災学習を実施、段ボールベッド作りなども行いました。また、岐阜県の各務原市立各務原特別支援学校では44人の生徒が非常時の炊き出しや応急手当などを学びました。



左:バンダナによる止血方法も体験、右:避難所を想定して初挑戦

**大阪府** 非常事態の大阪で  
入院患者のフォローアップ

日赤大阪府支部は、府の要請に基づき、大阪府入院フォローアップセンターへ支部職員(赤十字看護師)と大阪赤十字病院看護師OGの合計5人を派遣しています。新型コロナウイルス感染者数の急増で電話が鳴りやまない厳しい状況の中、派遣された看護師は専門知識を存分に活用した仕事ぶりを発揮、大阪府からも感謝の言葉をいただきました。



感染拡大のたびに要請を受け、3回派遣(右が大阪府支部職員)

**千葉県 香川県** 空港&石油コンビナートで  
事故を想定した大規模訓練

10月29日、成田国際空港で実施された航空機事故を想定した訓練に、千葉県の成田赤十字病院から医療救護班とDMATが参加。56機関から約600人が集結し、感染対策を意識した中での訓練は例年とは違った緊張感がありました。11月11日には香川県坂出市の石油コンビナート防災訓練に日赤香川県支部の救護班が参加。防災関係15団体と災害時の連携を確認しました。



左:空港訓練はジャンボ機も登場、右:石油タンク真横での訓練

常任理事会開催報告

令和2年12月18日、令和2年度第6回の常任理事会が開催されました。

- 1 独立行政法人 福祉医療機構からの運転資金長期借入金の借入について(伊豆赤十字病院)
- 審議の結果、独立行政法人 福祉医療機構からの運転資金長期借入金の借入については、原案のとおり議決されました。
- また、新たな給与制度等の構築、新型コロナウイルス感染症下における青少年赤十字〜国際交流活動〜、予算の補正にかかる社長専決事項について、それぞれ報告しました。

※オンラインによる開催となりました。

天皇皇后両陛下から御下賜金

12月22日、天皇皇后両陛下から、日本赤十字社の事業奨励のために金一封を賜りました。この御下賜金は、災害等による被災者救援事業のための資金として使用されます。

**全国** 皇后陛下のお誕生日を記念し、600本の手拭いの御下賜

12月9日、日本赤十字社の名誉総裁である皇后陛下のお誕生日に、陛下からの御下賜品「日本手拭い」600本が、日赤の介護老人保健施設や特別養護老人ホームなど7つの施設の入所者などに配られました。

皇后陛下3代にわたって続くこの行事は今年で65回目。特別養護老人ホーム小川ひなた荘(埼玉県)の松本功園長が施設最高齢の田口ミヨさん(102歳)に手拭いをお渡しする際に「皇后陛下からですよ!」と伝えると「まあ〜と目を丸くして驚き、岡本里さん(90歳)は、柚子をあしらった手拭いを広げ、うれしそうに「だいじ、だいじ」と語りました。また、同じく手拭いを受け取った特別養護老人ホーム豊寿園(福岡県)の三ツ石笑子さん(95歳)はハツラツと「元気をいただいたので、もっと頑張って長生きしたいと思います」と感謝の言葉を述べました。



左から田口ミヨさん、岡本里さん、坂田元夫さん(96歳)



左から永尾真弓さん(72歳)、三ツ石笑子さん、寺田美代子さん(88歳)

**長野県** ボランティアが守り、支える  
長野県赤十字歴史資料館

県内外から多くの見学者が訪れる「赤十字歴史資料館」。赤十字の礎を築いた看護婦の遺品や戦地での様子が分かる資料など、全国的にも貴重な展示を行う同施設もコロナ禍での来館者は例年の1割ほど。見学者の案内や啓発活動を行う長野県赤十字広報奉仕団は「自分たちができることを」と勉強会を開き、清掃活動を続け、赤十字精神の宿る同館を支えています。



100年以上前の建物を改修・復元した資料館を大切に守っていく

**長崎県** 南極の昭和基地と日本を結ぶ  
交流会を無線奉仕団が企画

長崎県赤十字無線奉仕団は、小学生と南極昭和基地の隊員とのアマチュア無線交流を開催。青少年赤十字加盟校の土井首小学校と木風小学校の6年生が、南極観測越冬隊の山本貴士隊員らと交信しました。児童からは南極の新型コロナウイルスについて質問が飛び、山本隊員は「南極大陸は唯一新型コロナウイルスが発症していない大陸としてまだ守られています」と説明しました。



約1万4000km離れた長崎と南極が心温まる交流でつながった

**北海道** 紀子さまがオンラインで学生ボランティアとご懇談  
献血の啓発活動などの現状を学生たちが説明

日本赤十字社名誉副総裁の秋篠宮皇嗣妃殿下は、12月1日、北海道で献血の推進活動を行う学生ボランティアとオンラインで懇談されました。昨年6月に北海道をご訪問予定でしたが、新型コロナウイルスの感染拡大で中止となり、オンラインでの実施に変更。東京・赤坂御用地の宮邸と、札幌市にある北海道赤十字血液センターをインターネットで結び、秋篠宮皇嗣妃殿下は学生たちから献血の現状やボランティア活動の説明を受け、若者の献血減少について「(啓発活動に)どのように取り組めばいいと思いますか」といった質問をされました。

また、11月26日にも、日本血液製剤機構の千歳工場をオンラインでご視察。工場の関係者との懇談の中で、血液製剤の安定供給などの課題について説明を受けられました。



写真:宮内庁提供  
学生ボランティアとオンラインで懇談される秋篠宮皇嗣妃殿下

「赤十字を応援!」プレゼントA ペこぼ 芸人

サイン入り  
「日めくり毎日ペこぼ」

3  
名さまに



血液が必要な人を応援することは、悪くないだろう!  
ピュ〜ウ♪

「今まで、なかなかになりたい自分になれなかった。でも今回、妖精になれて“献血チャンス”を伝えることができたんだ。ボクには、血液がある。でも今、血液が必要な人がいる。コロナ禍で苦しんでいる方々への応援をしよう。足りない人にあげることは、悪くないだろう!ピュ〜ウ♪」(松陰寺太勇)  
「『はたちの献血』キャンペーンキャラクターに就任させていただきました。はたちを迎える新成人の皆さん、まず献血のことを知って、そして足を運ぶという力は、だれかを救うということにつながっていると思いますので、皆さんも、献血会場に足を運んで…おくんまー!」(シュウペイ)

ペこぼ©松陰寺太勇とシュウペイによるお笑いコンビ。2008年4月結成。「M-1グランプリ2019」では初の決勝進出を果たし、3位を獲得。「時を戻そう」のフレーズで一躍人気者に。多数のメディアに出演中。



「赤十字を応援!」プレゼントB パートナー企業紹介 vol.10 さいとう製菓株式会社

津波の被害を受けながらも地域を支えた「かもめの玉子」が、寄付の原点



東日本大震災で発生した津波に、2階の屋根上までのまれた本社店舗

東北土産の定番「かもめの玉子」が人気のさいとう製菓株式会社。東日本大震災では、岩手県大船渡市の和菓子工場が津波に流され、本社や店舗も津波にのめられました。家を失った社員も多く、甚大な被害を受けながらも、地域の人々を支えたい一心で、震災直後から計30万個(3000万円相当)の「かもめの玉子」を無事だった倉庫からかき集め、避難所や高齢者施設へ配布。当時の経験は、赤十字への毎年の寄付支援につながっています。  
震災から10年がたとうとする中、リアス式海岸など風光明媚な景勝地を多く有し、復興が進められている岩手県ですが、新型コロナウイルス感染症の影響により、会社も世の中も不安定な状態で、観光客が戻らない厳しい状況が続いています。「それでも希望を失わず、何ができるかを常に考えながら社会に貢献していきたい」と、さいとう製菓。事業以外の部分でも、お客様や地域社会から望まれることに応えるべく、さまざまな努力を続けています。

①さいとう製菓株式会社

かもめの玉子ミニ (20個入)

5  
名さまに



岩手県産の素材の持ち味を生かしながら、しっとりほくほくの美味さをカステラ生地とホワイトチョコで包んだ

上記プレゼント希望者は、右記WEBサイトにてご応募ください。



インターネット  
アクセス

赤十字ニュース プレゼント 検索  
www.jrc.or.jp/publication/news/

ここから  
応募  
できます



上記プレゼント希望者は、以下の項目を明記のうえ、郵送・FAX・WEBでご応募ください。①お名前 ②郵便番号・ご住所 ③電話番号 ④年齢 ⑤赤十字NEWS 1月号を手に入れた場所(例/献血ルーム) ⑥1月号に関するご意見・ご感想

郵送/〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3  
日本赤十字社 広報課 赤十字 NEWS 1月号プレゼント係  
FAX / 03-6679-0785 WEB応募/右の2次元バーコードからご応募ください。  
1月29日(金)必着 ※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます

こちらから  
応募  
できます



# WORLD NEWS

インドネシアのボランティア活動

## 「新型コロナ」から村を守れ！ 防災ボランティアの活躍

インドネシアの小さな村にも忍び寄る「新型コロナウイルス」。日赤の防災事業で育成されたボランティアたちは自ら立ち上がり、コロナ禍の村々で活躍しています。

### 防災ボランティアの始めた活動が 村の人々の支えに

日赤とインドネシア赤十字社は、自然災害の多発するインドネシアの村々で、住民の防災力・減災力を高める「コミュニティ防災事業」を推進してきました。2016年4月に始まり2020年3月で終了しましたが、この事業で育成された防災ボランティアCBAT(シーバット)が、インドネシアの新型コロナウイルス感染者対策で大きな役割を果たしています。



マスク着用の習慣をボランティアが普及する

インドネシアにおける新型コロナウイルスの感染者数は60万人を突破し、東南アジア最多を記録。その渦中で、CBATたちは自分たちの判断で、村役場やモスク、集会所に赴き、消毒液の散布などの衛生活動を始めました。村の行政からも消毒薬購入などの予算がつき、毎月第3週は村落の消毒作業を村から任されています。さらに、人々が行き来する商店などに対しては来店客が手を洗ったりマスクをしたりする場所を用意するようアドバイスし、店に実践してもらうなど、隅々に目を配っています。

CBATは行政に公式に認可された活動団体です。CBATと認められた人に支給される青いユニホームには日赤の社名もプリントされ、それを身につけることは彼らの誇りでもあります。

### 「人間中心の開発協力」 人々が「立ち向かう力」をつけるために…

日赤の行う支援は「人間中心の開発協力」です。重要なのは、地元の人々の持つ力を存分に生かして、問題を解決する力や災害に立ち向かう力を身につけてもらうこと。日赤の実践的なトレーニングによって、現地ボランティ

アたちは中長期的に計画を立て、行政から資金提供を得られるようにプレゼンテーションのスキルも身につけました。

2020年9月から、日赤とインドネシア赤十字社は新たな事業をスタートさせました。次は学校や家庭、そして村の防災力を向上させることが目標です。11月にはコロナ禍をふまえた防災訓練も実施されました。新型コロナウイルス感染症の脅威はまだ続いています。赤十字の活動を通じて、人々が災害のみならず感染症に立ち向かう力も高めていきます。



日赤が育成した現地ボランティアは、救急法の技能からプレゼンテーション技術まで、さまざまなスキルを身につけた(写真は2018年)

数字で見えた! 世界で生かされる皆さまのご支援

世界中の災害や紛争から、人々の命と健康を守る日赤の国際活動。皆さまの寄付がどのように世界で役立てられているのかを、数字でわかりやすくお伝えします。

## 防波堤になるマングローブの苗を育てた数

# 2万 9700 苗

(2018年10月～現在までの取り組み)



マングローブの苗を育てる地元ボランティアと日赤職員(左から2人目)

日赤が支援したインドネシアのコミュニティ防災事業。その1つが、地域住民も積極的に取り組むマングローブの植林です。水辺に生育するマングローブは、津波や高潮の被害を抑制する防波堤としての役割も担うことができる植物。インドネシアではサイクロンや洪水の被害も大きく、マングローブの植林は災害時の安心につながります。また、マングローブの根元には小さな魚やエビが、花にはミツバチが集まるため、そこで得られる魚介類や蜂蜜が生計を立てることに役立ち、住民の生活向上に大きく貢献しています。日赤が育成した防災ボランティアの1人は「赤十字の支援を受ける前は、自分の知識や経験で人の命や健康を守るなんて想像もできませんでした。活動から学んだ一番大切なことは、自分たちの行動で村を変えていけるということです」と語りました。



消毒液の散布のため、地域を巡回するボランティア